

「貯蓄も、投資も！」

——日銀、証券界を 歩んだ私のお金遍歴

八尾 和夫

仕事は天下国家、家計は破綻懸念

「貯蓄から投資」への流れが急ピッチで進んでいる。NISAの拡充や金融経済教育推進機構(J-FLEC)の設立など、国を挙げた資産運用を取り巻く環境整備は、証券界に身を置くものにとっては大変喜ばしいことである。しかし、私自身が投資に取り組み始めたのは、社会人になってようやく30年を過ぎてからのことだ。もっと早く取り組んでいればよかつたという反省とともに、自分自身のお金にまつわる歩みを振り返ってみたい。

かつて妻は友人との間で、よくこんな会話を交わしていたと言う。「お宅のご主人、日

のだ」と心の中で反論している。

また、30歳という遅めでの香港大学留学も家計を圧迫した。学生の身分にもかかわらず幼子連れでの留学生活は、香港の高い家賃負担でまさに火の車であった。

そういう状況で投資に回せる資金など、どこを探しても出てこなかった。給与天引きの行内普通預金が限度額200万円に達することとはなく、唯一の支えは「行内住宅預金」と「財形住宅」といった引き出し目的が限定された強制的な積立て貯蓄であった。

当時の金利水準と言えば、1975年、私が入行した時の公定歩合は9%と過去最高、第一次オイルショック後のハイパーインフレに対処するためだった。その後金利体系は少しずつ低下していったとは言え、預金金利は今のエキイティもの高い利回り程度であった。当時は「預けておくこと」自体が立派な資産運用として機能していたのである。この面からも投資への動機は殆ど芽生えな

本銀行にお勤めだから、さぞかしお金の運用もお上手でしょう。羨ましいわー!」とんでもない。天下国家は論しても家計には全く無頓着、お蔭で家計は破綻懸念寸前ですよ」。私が投資に向かわなかった理由ははっきりしている。投資にかける「元手」と投資に向き合う「時間」がなかったからである。

私の新婚生活は借金から始まった。結婚直前のデート費用で貯金は底をつき、新婚旅行代は福利厚生フリーローンに頼らざるを得なかった。しかも、旅行中に最初の返済期日が来ることを失念し、職場の庶務担当者の機転に延滞者の仲間入りする危機から免れた。金融マンとしては誠に恥づかしい思い出だ。

人生最大の投資は飲み会

今に至るもそうであるが、私の信念は「人生最大の投資は飲み会」である。妻は「マンション1室分がアルコールに消えた」と嘆くが、「だからこそ今の人間関係と地位がある

かった。

給与は自社製品

元手が増えないもう一つの理由は、日銀では長年にわたり給与が自社製品すなわちお札で支給されていたことにあった。給与袋から自分に必要な活動費(?)を確保した後、残りを生活費として妻に渡すので、妻は私の給与水準を知らないという超亭主関白状態が続いた。したがって、私の「活動費」にも歯止めはなかった。その後、日銀でも給与振込制度が導入され、世間一般並みの「奥方が財布の紐を握る」かたちに移行し「お小遣いをもらう」立場に逆転した。その時初めて、自分が如何に恵まれていたか、思い知ることになった。

バブル崩壊を経て住宅価格がようやく手に届きそうになった1994年、2割の自己資金をかき集め、住宅ローンを組んで中古マンションを購入したが、巨額の借入れという重

庄に、家計の厳しさと貯蓄の尊さが改めて身に染みたことを鮮明に覚えている。

資産運用こと始め

資産運用の環境が整ったのは、2005年5月、30年勤めた日銀を退職し、第二の職場である全信組連に転じた時である。退職金で住宅ローンの残額を返済し、折しも末娘の就職により教育負担も解消された。手始めに堅実な金融機関の社債を購入したが、それでも元本保証のないものへの初めての投資に何とも言えない緊張感を覚えたものである。

本格的にエクイティものへの投資を始めたのは、2015年の東京証券信用組合への着任がきっかけだ。証券界の業域信用組合として、証券会社と取引するお客さまの気持ちをも身を持って体験しないことには仕事にならない、というのが直接的な動機であった。オーソドックスな大型株から始まり高配当株、リート、ETF、積立投信といろいろな

計簿アプリに姿を変えたが、数字の動きに一喜一憂するのは、いつの世も共通のものである。

貯蓄も投資も、その先に

「貯蓄から投資へ」のスローガンが、貯蓄の全てを投資に回すことを意味するものではないの言うまでもない。貯蓄は、決裁手段など生活の防衛線であるとともに、投資のための元手という大切な役割も果たしている。

そしてもう一点、貯蓄はそれ自身が低リスクの資産形成手段であることを見逃してはならない。しかし、異次元緩和の時期、とくにマイナス金利政策により、預金金利は極限まで低下し、運用のプロである銀行が預金者に対して合理的な利息を提供できない状況に追い込まれた。国民が「安心して預ける」枠組が壊れてしまったのだ。今、金利の正常化が進んでいる。銀行が適切な金利を提供して安全資産の価値を守り、その土台の上に、さら

銘柄に小口分散して取り組んだ。始めてみると、異次元緩和の影響で郵便切手代ほどしか利息がつかない預金に比べ、数パーセントの利回りは誠に魅力的であった。「これでゴルフ代が出るか」と考え始めると、投資は俄然面白みを増した。ゼロから始めたエクイティものの投資比率は、株価の上昇とも相俟って、今は3割を超えている。

実は、私にとって株式は決して遠い存在ではなかった。幼い頃、同居していた祖父は乾物屋を経営していたが、午後は自室に籠り、自分専用の日経新聞を傍らに、短波放送から流れる早口の株式市況を聴きながら独自の「帳面」に記入することを日課としていた。毎週1回、サラリーマン風の男性が出入りしていたが、それが証券会社の営業マンであったことは後年知ることとなった。祖父が時折、思い出したようにくれた小遣いは、今思えば配当が入った時の「お裾分け」だったのであろう。かつての祖父の帳面は、孫の時代に家

なる上乘せを求めて証券投資がある、そういう健全な姿がいよいよ取り戻されることになるのだろう。

これとも関連するが、国民の健全な資産形成のために銀行界と証券界の連携が不可欠である。かつて昭和30年代前半、「銀行よさよ」なら、証券よこんにちは」という流行語があった。しかし、それも今は昔。FIECの設立は、旧金融広報中央委員会を核に、銀行界と証券界がタッグを組んだからこそ成し遂げられた。

安心して銀行に預けられる金利体系と、成長の果実を分かち合う投資文化、この二つは、国民の資産形成を支える両輪である。

「貯蓄も投資も!」、その先には「豊かな日常」が待っているはずだ。

(東京証券信用組合 理事長)